

中学校における人間関係を形成するプログラムの開発

—人・もの・ことの出あいを学習資源として—

A Practical Study of Program Building Human Relations for Junior High School Students:
People, Goods and Activity.

小坂 浩嗣, 園田 雪絵

KOSAKA Hirotsugu and SONODA Yukie

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第35号

Bulletin of Center for Collaboration in Community
Naruto University of Education
No.35, Feb, 2021

中学校における人間関係を形成するプログラムの開発

—人・もの・ことの出あいを学習資源として—

A Practical Study of Program Building Human Relations for Junior High School Students: People, Goods and Activity.

小坂 浩嗣*, 園田 雪絵**

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学

**〒774-0049 阿南市上大野町大山田52 徳島県立阿南支援学校

KOSAKA Hirotsugu* and SONODA Yukie**

*Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**Tokushima Prefecture Anan Special Needs School

52, Ooyamada Kamioono-cho, Anan, 774-0049, Japan

抄録：本実践研究では、生徒一人一人の自尊感情のさらなる育成と、よりよい人間関係の基盤づくりをめざし、中学校入学時からの学校生活における、「人・もの・こと」との多様な出あいを生かすプログラムを開発し、その教育的効果について検証することを目的とした。A中学校の1年生（161名）を協力学年として、X年4月～X年10月の期間に、「出あう・つながるプログラム」を計画・実践した。学級活動と学校行事を関連させた取組では、その教育効果についての分析結果から、本実践で取り組んだプログラムが人間関係づくりに有用である可能性が示唆された。また、今後の課題として、①教育課程を考慮した3年間を見通すプログラムの検討、②スキル学習との併用、③身につけた人間関係調整力を、学校外でも活用できるよう汎用性をもたせることが挙げられた。

キーワード：人間関係づくり、出あい、構成的グループ・エンカウンター、人間関係調整力

Abstract : The purpose of this research is to inspect the educational effect about the program developed for to bring up self-esteem and to make a foundation of the human relations for a student at a junior high school. A program made school events relate to class activity. A point is attention to the diversity of "People, Goods and Activity" in a junior high school. A target was 1st grader's 161 of A junior high school. A period was April an X year-October an X year. As a result, a possibility that a program is useful for human relations making was suggested. As a problem, ① consideration of a program based on a curriculum for 3 years. ② consideration on the relation between the skill learning and the programming. ③ it was consideration of how to use the coordination of human relations

Keywords : Building Human Relations, Encounter, Structured Group Encounter, Coordination of Human Relations

I 問題と目的

1. 問題の所在

学級担任は教育活動を通して、生徒や同僚の教職員、保護者とのかかわりから多くのことが経験できる。学級には自分の目標に向かい学びを深めていく生徒がいる一方、小さなきっかけにもかかわらず、学校不信や人間不信に陥ってしまう生徒など、学級担任は多様な出あいと関わりを経験する。なかには、行動の形は様々で良し悪しもあるが、自分をどうにかして認めてもらいたいがた

めに、逸脱した行動をとってしまう生徒がいる。学校や学級で、自分の思いや考えを相手に素直に表現できずトラブルを招いたり、自分の心とは裏腹に教師に反抗的な態度をとったりする生徒もいる。彼らの生きにくさを目の当たりにしながら、支援・指導していく日々のかかわりで、効果的な支援方法を模索している教師は少なくない。その中でも、人間関係の形成に関するニーズは従来多い。人間関係で不調に陥っている生徒は、心の発達が未熟なため適応が思うようにならず、他者とのかかわりが希薄になりがちで、一部の人間関係に固定化してしま

うことが少なくない（井上信子，1986；平山栄治，1998）。

近年の傾向として、情報化の進展により間接体験や疑似体験が膨らむ一方、実体験を通して望ましい人間関係を築くための社会性を身につけにくくなっている（文部科学省，2010；河野哲也，2018）。このような状況の中で、対人関係が未熟なために、協力して生活を送れなかったり、社会性の未熟さが原因でいじめや不登校に陥ったり暴力行為などに至ったりする生徒も少なくない。なかでも、人間関係を築こうと自助努力せず退廃的な言動を繰り返す生徒は、卒業後に社会で自分らしく生きぬくことが難しく、苦勞を強いられることが予測される。

都市化や少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化が進む一方、激しく変化する社会で生きていく生徒たちは、未知の課題に試行錯誤しながら対応することが求められる。そのような社会では、課題解決に向けた主体的・協働的、能動的な学びが必要であり、想定外の事象や未知の事象に対して、自分のもつ力を発揮して主体的に解決していこうとする力が必要だと考える（経済産業省，2006；三崎隆，2014；文部科学省，2017）。

経済産業省（2006）は、「社会人基礎力」を構成する3つの能力を提示している。1つ目は、「前に踏み出す力」である。答えが1つに決まっていないことに対して、試行錯誤しながら失敗を恐れず、自ら一步前に踏み出し失敗しても他者と協力しながら粘り強く取り組むこと。2つ目は、「考え抜く力」である。物事を改善していくために、常に問題意識をもち課題を発見すること。その上で、その課題を解決するための方法やプロセスについて十分に納得いくまで考え抜ける力である。3つ目は、「チームで働く力」で、いわゆる協働する力である。自分の意見を的確に伝え、意見や立場の異なるメンバーも尊重した上で、目標に向け共に協力する力である。これらの3つの力は、複雑で予測が困難となってきた社会の中で、生徒が自分らしく豊かで幸せな生活を送り、社会の中で孤立することなく、誰かと、何かで上手くかかわりをもって自己実現していくために必要な力だと考える。そしてこれらの力は、これからの生徒に必要なことは十分に理解できる。ただ、これらの力をいつから、いつまでに、どの程度、どのようにして育成すればいいのか。基礎力とは言いながら、教育する側の教師は、基礎となる要素は何なのか十分に考えておかなければならないだろう。

2. 実践校の状況と課題

全校生徒数は500人弱の中規模中学校で、複数の小学校が校区内にある。創立70年以上の歴史と伝統があり、往年は生徒数が千人を超える県内有数の大規模校であったが、少子化の影響で現在は半減している。生徒たちは

「あいさつで 広がる友情 明るいA中」を合言葉に、生徒会が主体となり学校行事を盛り上げるなど、学校生活を活発に過ごしている。また「ひたむきに 凛と 今を生きる」を教育理念として全教職員が一丸となり、生徒と共に教育活動に取り組んでいる。

実践研究を行うに際し、全教職員を対象に生徒・学校・教職員のよさと課題について聞き取り調査とアンケートを行った。その結果、生徒のよさは「明るく人懐っこい」、「全体に落ち着いており、自尊心も高い」、「純粋で前向きな生徒が多く、指示されたことは真面目にやる」が挙げられた。課題は、「集団活動に馴染めない生徒、不登校の増加への対応」、「積極性に欠け、自主的に行動する生徒が少ない」、「受け身の生徒が多く、全体を見ることができない」が挙げられた。また、アンケート調査の結果について、生徒を取り巻く人間関係に関して精査すると「周りに合わせて、自分の立ち位置をはかっている」、「人間関係は様々だが、相手とかかわろうとする気持ちはやや弱く、受身である生徒の存在が気になる」、「自分が楽な人として、かかわりを持たず、面倒な人とはコミュニケーションを必要以上にとらない」が挙げられた。聞き取り調査の分析からも、「多様な教育活動の中で、人間関係づくりに取り組んでいるが、思うような成果となっていない」という意見が多くあった。

これらの分析結果から、これまでの多様な教育活動による人間関係づくりの取組を通して、自尊感情の育成には一定の成果が認められるが、仲間関係を形成したり深めたりすることや、仲間と協力し集団で取り組んだりすることに課題があると捉えた。これらの課題に対して、どのように取り組み、どのような方策が効果的であるか、検討しておく必要がある。

学校教育の基礎集団である学級に着目し、学級活動の意義について考えておく。学級という場合は、生徒にとっても教師にとっても重要な場であり、学校生活の基盤としての役割をもっている。それゆえ、学年や学校全体の協力体制の下に、意図的・計画的に学級経営をすすめ、生徒が心理的に安定して帰属できる『心の居場所』として機能させることが重要である。特別活動の目標には「人間関係を築くことに力点が置かれていることをもとに、学級活動の目標として、「望ましい人間関係を形成すること」を新学習指導要領では明確に示された（文部科学省，1998，2008，2017）。

新たに明示された、「人間関係を形成する力を養う活動」について、松尾・葛西（2015）は、児童生徒の人間関係を上手く結ぶ力を人間関係調整力と概念規定し、その育成に向けたプログラムの開発を行った。そして、人間関係調整力を育成するためには、自己・他者・集団の相互作用に視点をおき、自他や集団の中で理解すること、受容すること、表現すること、合意形成することが人間

関係調整力を養う重要な能力であるとした。これらの能力は、シェアリングや構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter；以後SGEと略記する）などの手法により、個々に育むことができるとした。

3. 研究の目的

これらのことを踏まえ、本実践研究では、生徒一人一人の自尊感情の育成と、よりよい人間関係の基盤づくりをめざし、入学時からの中学校生活における多様な出会いを生かすプログラムを開発し、その教育的効果について検証することを目的とした。実践上の小課題として、①自尊感情を高める、②人間関係スキルの習得、③学級の土壌づくりを挙げる。

II 対象と方法

1. 期間と協力学年

実践期間は、X年4月～10月、A中学校の1年生（161名）を協力学年とした。

2. 方法

実践の期間を3期に分け、各期に実践の課題を設定した。前期は、個と集団の出会いを大切にしたい自他を認め合う人間関係づくりやルールづくりを行い、中期は、仲間を深く知るとともに、学級集団の見つめ直しを行い集団の成長と確立をめざし、後期には、個と集団の高め合い、新しい出会いのための別れ、という計画を立てた。実践の時間は、学級活動、道徳、総合的な学習の時間に割り振り、その時間を「出あう・つながるプロジェクト」と名付けた。指導体制としては、授業の実施は主に学級担任が行い、筆者は学年主任や学級担任と連携し、生徒の実態に応じた各エクササイズの指導案や資料づくり、準備等を行うこととした。実践で留意したことは、①学年主任や学級担任、学年団と連携し、各学級の状態や生徒の実態を把握したプログラムを実施する、②学習後は振り返りを行い、内容等を検討し次時のプログラムへ反映する、③学校行事等と関連させた学級活動をプログラム化することとした。効果の検証は、毎回の授業実践後に、生徒のふりかえりシートから生徒の変容や気付きを分析した。また、授業実践した担任への聞き取りを行った。さらに学校生活アンケートを作成し、4月、7月、11月に3回、効果の検証を行った。このアンケートは、対人関係能力を育成する「社会性と情動の学習」プログラム（Social and Emotional Learning of 8 Abilities；以後SEL-8学習プログラムと略記する）で使用された尺度を参考に、現職教員3名（中学校教員2名、小学校教員1名）と筆者らにてアンケート項目の内容妥当性を精査し作成した。

III 実践の結果

「出あう・つながるプロジェクト」の実践から、「お互いのことを知り合おう」、「自己表現個人ワーク」、「学年合唱」の結果についてまとめる。

1. 「お互いのことを知りあおう」

(1) 授業の概要

1) 実施日：4月26日（学級活動：SGE）

2) ねらい：新学期の新しい学級担任や仲間との出会いをもとに、学年初めの時期に、生徒同士が、じゃんけんゲーム等を通して自然とお互いにかかわり合う中で知り合い、よりよい人間関係を築いていくことができることを目標とした。

(2) 授業の様子

授業はどのクラスも、賑やかで楽しい雰囲気の中で行われていた。指導案を提示した後に、担任がそれぞれの学級に合うように相談や工夫をして実施した。始めのアイスブレイキングで、担任対生徒で「あいこじゃんけん」と「あとだしじゃんけん」を行った後に、グループワークに入った。TT（ティームティーチング：複数の教師で授業を担当する指導形式。以後TTと略記する）の実施により、支援学級の生徒も共に交流学級にて全員が授業を受けることができていた。当日は年度当初の授業参観日でもあり、子ども達の素直で活発な姿を見ることができ、保護者の方々が微笑ましそうに参観されていたことも印象的であった。

(3) 生徒のふりかえりシートの分析と結果

ふりかえりシートでは、4件法にて回答し、すべての項目において平均値が3.2ポイント以上あり肯定的な回答であった。項目別に分析すると、「このような学習をまたやってみよう」（3.6ポイント）、からは楽しく活動が進められたことや、エクササイズが生徒の実態に合っていたことが分かる。また、「クラスの仲間同士、親しくなった」（3.5ポイント）、「他者の気持ちを考えることができた」（3.4ポイント）、「思っていることを表現できた」（3.3ポイント）では、自分の思いや考えを伝えることができるとともに、相手の気持ちを察しながら話しが聴け、友達との距離が縮まり親近感がもてたことが分かる。また「クラスのために協力できた」（3.3ポイント）、からも学級へのかかわりがもてたことが分かる。

生徒のふりかえりからは、「小学校が一緒だった〇〇さんは、何となくこんな人だろうと予想していたけど、意外なところもあったので驚いた」、「気軽に話すことで、いろいろなことが分かって面白かった。仲良くなれて嬉しかった」、などの感想があった。これらから、今年度9つの小学校から入学してきた生徒たちが、入学後の間

もないこの時期に、このSGEを行うことによって、①あまり知らない生徒同士が誰でもできるじゃんけんを通し、一定のルールの中で、楽しく話す機会が設定され『話す』という表現活動ができたこと、②これらの活動で、生徒間で新しい友達ができたと、話すことによって新たな他者理解の扉が開くと共に、相手に対する理解が深まったことが読み取れた。

(4) 教師とのふりかえり

「このSGEは時期的にはよかった」、「入学して間もない時期で、生徒同士は顔と名前が一致してきた様子もありちょうどよかった」から、時期が妥当であったと捉えた。「誰もが親しめるじゃんけんで、全体が和やかな雰囲気となり、スムーズに足し算トーキングへと入ることができた。」「生徒の実態にぴったりだった」から、どの学級の生徒も、入学して間もないこの時期で、まだまだ幼い感じの残る生徒や学級の雰囲気にあった内容であったことが分かった。また、「話題が広がらないことを想定し『コミュニケーションの技』シートを作成したところ効果が見られた」、「足し算トーキングでは、相手の話を聴くことを意識させて取り組んだことで、どの班もスムーズに活動できていた」からは、担任が生徒の様子に応じて工夫をしていることが分かった。「指導案を読み、他の担任との会話から、生徒の実態や時間配分などを考え、じゃんけんの種類を減らした方がよさそうであり、そのように実施したところ上手く進めることができた」からは、教師間での指導に関する交流もあったことが分かった。また、「授業を見回っていると、廊下にも大音量で『じゃんけん、ポーン!』が聞こえてきた」、「生徒たちの活気がすごかった」、「A（支援学級在籍）が上手く移動できる心配だったが、周りが上手に動いていた」から、生徒たちは、とても興味をもち意欲的に取り組んでいたことや、自分にできる方法で取り組むことができ、関係づくりのよい雰囲気となったことが分かった。

改善点には、①振り返りの時間が十分でなかったこと、②足し算トーキングの時間配分を考え多くの出会いをつくること、③支援を要する生徒、活動が理解しにくい生徒への手立て、④足し算トーキングの発言内容を深めること、などが挙げられた。

(5) まとめ

第1学年の学年目標は『仲間づくり』であった。授業に関しては、実施時期と内容、また生徒の実態がプログラムに合っていたことがよかったと思われる。課題は、時間配分の工夫と、シェアリングの難しさが挙げられる。また、自分のことを他者に向けて表現することはできていたが、それらを仲間と分かち合うことが少なかったと思われる。今後は、シェアリングを充実させ、仲間と気持ちを共有できるよう進めることも重要であることが分

かった。

2. 「自己表現個人ワーク」

(1) 取組の概要

- 1) 実施期間：〔第1回目〕7月初旬の1週間（朝の自習時間20分）、〔第2回目〕10月下旬の1週間（朝の自習時間20分）
- 2) ねらい：多忙な生活をしている生徒たちにとり、一定の期間と時間で自分の心と向き合い、気持ちを「かたち」にすることで、混沌とする気持ちなどを整理するとともに、この活動により、自分の感情と上手く向き合い、新たな自己発見や自己認知につながることをねらいとする。また、自己表現力の向上を図り、対人関係において自分の気持ちや考えを率直に表現できる力を育て、人間関係において派生する問題を軽減することもねらいとした。

(2) 個人ワークの様子

1) 第1回目

1日目は、各学級担任が自習担当をした。生徒たちは、あらかじめ説明を受けており、落ち着いて取り組むことができた。配布されたワークシートの説明を読み、自分の思ったことをすらすらと書きこんでいる生徒や、ペンがすすまない生徒、じっと考えて少しずつ書く生徒、また何を書けばよいのか分からず教師に質問をする生徒などがいた。20分間で自分のことについて考え、自分なりに取り組むことができた。

2) 第2回目

大半の生徒は第1回と同様に取り組んでいた。この時期になると、自分の学校生活に自分のリズムができており、決められた時間内に自習をこなす生徒もいれば、他の課題をして自習時間が不足したり、遅刻したりする生徒もいた。自習形式ではあるが、生徒に任せきりにするのはなく、個に応じて指導を行う必要があることが分かった。

3) 個人ワークシートについて

ワークシートは、既存の数種類あるものから担任と相談し選定した。生徒の実態やそれぞれの時期にふさわしい内容を選んだ。既存のワークシートは授業形式で行うものであったが、今回の取組では20分間の自習形式で実施するため、筆者が改良を加え、生徒が一人で自学自習の形でいけるよう準備した。

(3) 生徒のふりかえりシートの分析と結果

第1回目のワークシートは主に『自分とつながる』、第2回目のワークシートでは、『ひと・もの・こととつながる』というねらいで取り組んだ。ふりかえりシートの全ての項目において2.7ポイント以上を示し、肯定的な回答であった。第1回目の生徒のふりかえりから、「普段は自分のことについて考えたりしないので、自分のい

ろいろなことが分かった」,「言えないことを紙に書くことができて,モヤモヤが解消された。今までにたまっていた不満や怒りなどがなくなってスカっとした」から,自習時間に自分と向き合い,自分について書くことで,今まで自分と向き合ったことがなかった生徒は,自己理解が深まったこと。また,個人ワークをすることにより,心がすっきりしストレス解消できたこと。そして,今の頑張っている自分を再認識し認めることで自分が好きになったということが読み取れた。第2回目の生徒のふりかえりから,「つながり地図では,多くのつながりがあり今の自分がいるのだと感じた。もっと考えると,たくさんつながりが発見できると思う」,「普段は考えることのなかった自分の気持ちや友達・仲間・ものとのつながりを考えて新たな発見などがあつた。これからはそのつながりを大切にしたい」から,友達や仲間,ものとのつながりに気付き,それらに関して自分自身で何らかの考えや感情を抱き自己と向き合えたことが読み取れた。さらに自分の周囲とのかかわりや関係を実感できた生徒,自分のあるべき姿を想像したり予想したりするなど,自己を内観できた生徒もいたことが分かった。

(4) 教師とのふりかえり

朝自習の時間の中でも,一人で落ち着いて取り組み,自分と向き合う生徒が多いたことを確認できた。時期も妥当であり,教科学習ではないため,気楽な感じでほとんどの生徒が取り組むことができた。また,個々の生徒が抱えているより詳細な心理状態を知ることができたことがよかったことが挙げられた。改善点として,自習形式での指導法や,支援を要する生徒へのさらなる手立てを考えなければいけないことが分かった。また,実施後の気になる生徒への個別支援や適切な対応が必要なこと,自己表現は十分にできているが,自己の内面や行動面に対する気付きに発展していけるように工夫しなければいけないことも分かった。

(5) まとめ

自己表現個人ワークでは,「自分を実感する」,「自他とつながる」ことを目的として実施した。“どんな表現をした”を重要視するのではなく,生徒自身が安心してワークシートを通して自己と直面したり,心の声に気付いたり,触れたりし,「自分を実感すること」や「自他とつながること」が大切であることが確認できた。取組から,①自己表現することで自己理解や新たな自己発見ができたこと,②過去の自分や,今の自分を受容することが生徒自身で行えたということ,③取組ではワークシートが書けなくともワークシートの文を読み,自分や友達について考えることにも意味があつたことが分かった。また,自分と向き合えなかつたり,向き合うことに不安を感じたりした生徒については,少しずつ自分や周囲と歩調を合わせるように見守り,手立て

を工夫していかなければいけないと考える。また,生徒を指導する教師の側からは,生徒自身の思いや考え・悩み等を発見できる機会にもなり,生徒理解に有効であることが分かった。今後も,時期をみながら生徒が自己と向き合え,他者とのよりよいかかわりがもてるように計画し,継続していければよいと考えられる。

3. 「学年合唱」

(1) 取組の概要

1) 取組期間: 7月~9月

2) 授業: 学年練習(5時間)・学級活動(2時間 SGE)

3) ねらい: 『A中祭! 伝え響いて, つながろう』を目標に掲げ, 1年生の活気ある歌声を生かし, 楽曲や学年合唱に対する自分の思いを表現するとともに, 合唱を通して他者を尊重し協力することで, 仲間とのつながりを感じ取りながら, 学年合唱を全員で創りあげる達成感や所属感を得ることをねらいとした。また, 学級活動では, 生徒が個々に自分の思いや考えを発表し, それらをもとに班で合意形成を行うなど, 話し合いの方法を体得することもねらいとした。

(2) 取組の様子

1) 取組全体の経緯

文化祭では, 各学年が表現活動や展示活動を行うことになっている。例年2・3年生は表現活動が主になり, 学級でのダンスや劇が披露される。協力学年の1年生は, 学年の目標である, 『仲間づくり』に関連させ, 学年全体で取り組める「学年合唱」を行うことになった。これまで何度か学年合唱を行ってきたが, 生徒たちの多くには「歌わされている」という感じがあつた。今回の学年合唱ではそれらを払拭し, 目標や目的意識をもち, 仲間を意識した合唱表現をさせたいと考えた。そこで, 学年主任や音楽主任に相談し, SGEの手法を生かした取組を提案することになった。

学年会で以下4つのことを提案した。①学年合唱をするにあたり, 『伝え響いて, つながろう』を目標に, 学年合唱を行うこと, ②音楽科で歌唱練習を行うと共に, 2つの楽曲に込められた思いや願いを知ること, ③学級活動で一人一人がこの楽曲を通して伝えたいことや表現したいことを考え, 個人カードへ記入すること, ④文字にすることで意識が視覚化されるとともに, 同じ楽曲を歌う仲間が抱えている思いや考えを知ることができ, 学級や学年の仲間と共感して歌うことができることであつた。また, この個人カードをコラージュ^{註1}することで, 生徒の思いや願いを貼り合せ, 『仲間』という形に視覚化し, 歌唱表現するというコンセプトであつた。学年会では提案が承認された。また, この活動によって, 生徒に主体性を養いたいという理由から, 学年合唱と合わせて, 生徒による司会と呼びかけの取組も加わつた。

2) 共同コーラージュについて

「共同コーラージュ」は、各学級で学年合唱に対するSGEで、「個人カード」と「班の目標」を作成し、それらを貼り合わせて1つの言葉に形作ったものである。「個人カード」は、学年合唱に対する自己の思いや願い、これらの歌を誰に届けたいかなどを記入したカードである。生徒たちは、「1年生全員で心を1つにして歌いたい」、「いつもお世話になっている先生や家族のために“ありがとう”の気持ちをこめて歌います」、「自分たちの思いが聞いている人に伝わるように歌いたい」、などの思いを表現していた。それらの1枚1枚を『仲間』の言葉に形取った中に貼り合せた。この『仲間』は1年生の学年目標の1つになっており、学年便りのタイトルにもなっているキーワードである。「班の目標」は、各学級の班で話し合い、合意形成して考えられた40枚の目標となった。例えば、「たくさんの人に勇気と感動をあたえ、感謝の気持ちをこめて歌いたい」、「一つ一つの言葉を大切に、仲間と歌う大切さを考える」、「1年生みんなで一生涯懸命歌い、笑顔いっぱい文化祭にする」などであった。これらの共同コーラージュの制作は、1年生の人権委員会と自主参加した10人の生徒たちで行った。文化祭前日の放課後に教室に集まり学年の教師と一緒に完成させた。作業が始まったころの生徒たちは遠慮がちであったが、作業が進むにつれ互いに、知恵を出し合ったり、考えや意見を伝え合ったりして完成させた。

(3) 授業の様子

1) 学級ごとの取組

7月から、音楽の授業で2曲の練習が始まった。楽曲は「Let's search for Tomorrow」の合唱曲と、「あとひとつ」のポピュラーソングであった。音楽科担当教師が、明るく活発で、表現活動の得意な傾向にあった生徒の実態を考慮し選曲した。授業では、早々と前に出て準備し、仲良く楽しそうに歌う様子が見られた。生徒たちは、教師の指導に沿って素直に歌い練習に励んだ。ある学級の授業では、女声の高音域を出す練習で、教師が範唱をすると、照れることなく同じように歌う姿があり、他の生徒たちも同様に楽しみながらリズムに乗って練習することができていた。

2) 学年での取組

夏休みの登校日に体育館で学年練習をした。並び方、入退場の仕方、姿勢や表情などの全体練習を行った。非常に暑い中ではあったが、生徒と教職員全員で集中して取り組めた。「呼びかけ」は、司会と歌詞の朗読を行う代表者7人を人選した。生徒たちは、役割分担をすぐに決め、練習もスムーズに進み、2回の読み合わせでOKとなった。生徒たちのやる気と使命感の強さを実感した。彼らの行動や呼びかけの声に感化された1年生たちは、いつもの練習より大きな声で合唱していたのが印象に

残った。

(4) 生徒のふりかえりシートの分析と結果

ふりかえりシートでは、4件法にて回答し、すべての項目において平均値が2.6ポイント以上あり肯定的な回答であった。詳しく質問内容を分析すると、「班のためにどのくらい協力することができたか」(2.9ポイント)、「仲間とどのくらい親しくなれたか」(2.8ポイント)、「他者の気持ちをどのくらい考えることができたか」(2.8ポイント)から、学年合唱の活動を通して他者を理解し受容できたことが分かる。また「思っていることをどのくらい表現できたか」(2.8ポイント)から、個人の目標や班の目標カードを書いたり、それらのカードを共同コーラージュしたりしたことによって、表現できたことを実感したことが推察される。以下、ふりかえりシートから、①協力に関すること、②自分の思いや他者の気持ちに関すること、③今後の生活への生かし方の3つに分類し、分析したことをまとめた。

1) 協力に関すること

生徒の記述内容から4点のことが析出された。①意見が1つにまとまった嬉しさや達成感を味わえたこと。②目標設定は一人ではできないため、自分の考えと、班員の意見や考えを織り交ぜなければいけないことが分かったこと。③班長やリーダーの存在が重要で、その働きによって成果に違いがでること。④まとめ役の立場になった生徒は、話し合いの仕方や難しさを実感することができたということ。

2) 自分の思いや他者の気持ちに関すること

生徒の記述内容から2点のことが析出された。①班での話し合いで、自分の意見を言えたことや伝えられたことで、個々の意見が尊重されたこと。②十人十色の意見があることを知り、同じ意見に共感し、違う考えに驚いたり、新発見したりすることを体験することができたこと。これらから、他者への気配りや思いやりが大切であることが分かったこと。

3) 今後の生活への生かし方

生徒の記述内容から4点のことが析出された。①学年合唱における班活動での合意形成によって、生徒は集団活動における目標設定の大切さや、話し合いの方法を知ることができたこと。②話し合い活動が授業や学校生活の中でも、生かせるという意欲づけになったこと。③目標に向かって一つのことを達成するためには、自分だけではできないことや、他者のことを考え理解し、仲間と協力していくことを体験できたこと。④リーダー的存在であった生徒は、自分の力を試し評価する場面となったこと。

(5) 教師とのふりかえり

「集団のまとまりを意識し凝集することができた」、という教師のふりかえりから、この時期に学年合唱を実施

することは妥当であると捉えた。内容に関しては、「今回の文化祭での学年合唱は、ほとんどの生徒が合唱に対する思いや目標をもって歌うことができた」、「ただ歌うという表現ではなく、団結するという意志をもって取り組めた」、「共同コーラージュの『仲間』は生徒自身の内面が形に表すことができた」などより、これらの取組を通して他者を尊重し、仲間とのつながりを感じ取りながら、学年合唱を全員で創りあげる達成感を得ることができたことが分かった。また、生徒一人一人の思いや願いを示した個人カードが、共同コーラージュの作成によって、集団への所属感を表現できたことも分かった。

生徒の様子については、「取組を始めたときは受動的であった。個人カード作成や、話し合いを通じた班での目標づくり、共同コーラージュ制作などの一連の取組を通して、練習や準備への主体性が現れた」、「全体練習で姿勢や表現への指摘を受けたり、声量や表情を誉められたりし、教師と共に学年合唱を創りあげていく中で、学年の一員として自分はどのような責任を果たさなければならないかを自覚しながら、望ましい行動を自ら選択、決定し生徒たちが変容していったことが実感できた」、「本番を終えて、『楽しかったです。先輩が目の前にいたので、めちゃくちゃ緊張しました』、『拍手があって、びっくりしたけど嬉しかった』、『失敗もあったけど、最後まで歌えてよかったです』という生徒の声からは、1年生全員で合唱表現できた満足感を感じたことが分かった」、「本番の文化祭では、1年生らしい一生懸命な姿を会場で披露できてよかった」という意見や感想があった。改善点としては、①柔軟性をもった時期を見通した計画が必要なこと、②SGEのねらいを明確に把握し、指導内容の定着を図ること、③学年合唱の意義を踏まえ、学校行事に位置づけること、が挙げられた。

(6) まとめ

生徒による自己評価や教師のふりかえりから、学年合唱に対する学級活動での取組は、仲間意識を高めるために効果的であったことを確認できた。その理由を4つ挙げる。1つ目は、一人一人の思いを個人カードに記入し、班で合意形成したことにより協力することの大切さは知っていたが、具体的な班活動を行うことにより、その重要性を実感できたこと。そして協力し合えた活動がもとなり、形となった成果物や合唱表現できたことから、自分の思いや考えを伝えることの意味や大切さを知り、他者の考えや意見を聴くことなどの大切さも知ったことである。2つ目は、班の目標を決める活動や、共同コーラージュの製作過程に置いて、自分の意見を言うことで作業が進んだり、よい方法が見つかったりしたことである。3つ目は、他者の多様な考えを知って驚いたり、共感したりすることも他者を理解する上で必要なことが分かったことである。4つ目は、学年合唱の活動の中で、

学級委員と共に、司会や呼びかけのリーダー的存在となった生徒は、自分の可能性を見出すとともに役割の重要性を知り、今後の学校生活への意欲へつながったことである。

仲間関係に課題を抱えた生徒たちにとっては、少数の班員内でも自分の身を守ってしまう傾向にある中で「学年合唱をみんなの力でどんな合唱にするか」という一つの目標に向かい、合意形成を成し遂げられたことで、これまでの人間関係を打破し、自分らしさを出し、他者を受け入れ、新たな関係ができたと考えられる。今後はこのような機会を継続していくことで、生徒がよりよい人間関係を自ら築いていくことを可能としていきたいと考える。

IV 考察

本実践では、よりよい人間関係の基盤づくりをめざすことを目的に中学校入学時からの学校生活における、「人・もの・こと」との多様な出会いを生かすとともに、それらに関するプログラムを開発し実践した。その教育効果について学校生活アンケートの分析結果から、5つの成分に上昇傾向や横ばい傾向が認められ、本実践で取り組んだプログラムが人間関係づくりに有用である可能性が示唆された(図1)。

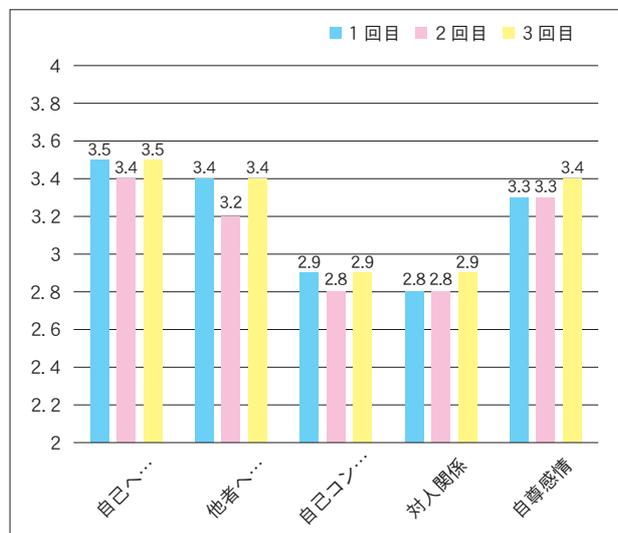


図1 学校生活アンケート各成分の結果 (n=154人)

この結果について、1点目は学級活動で果たされる学級の機能について、2点目は人間関係調整力の作用について、2つの観点から考察する。

1. 学級の機能について

本実践の前期における「個と集団の出会い」を大切に自他を認め合う人間関係づくりやルールづくりをめざした取組で、4月・5月に系統立てて実施したプログ

ラムは、仲間関係を醸成するのに効果的だったのみならず、学級への帰属感を高めることについても効果的であった。また、文化祭では、学年活動である「学年合唱」と学級活動で取り組んだ「共同コラージュ」を連結させた計画と実践が成果に結びついた。その理由として、①感動のある実体験ができたこと、②成果が実物となり表現できたことが挙げられる。

このような学級活動と特別活動を関連させた取組を教育活動の中で意図的に計画する際には、学級や生徒理解を十分に踏まえ、プログラムや取組のねらいと関連させて計画することにより、効果の上がることが示唆された。さらに、生徒個人と学級集団のレベルもあれば、学級集団と学年集団のレベルもある。学校行事や学年行事などと連結させた取組を計画する際には、どのレベルを重点化するかも要点であると考えた。

2. 人間関係調整力の作用について

本実践では、生徒が仲間と共に活動することを通して、自己を伸長させることもねらいに、小課題として、①自尊感情を高める、②人間関係スキルの習得を挙げた。これらについては、人間関係調整力の要素に挙げられた「受容すること」、「表現すること」が効果的に作用した。7月と10月に2回実施した「自己表現個人ワーク」では、生徒が自己を見つめる機会を設定したことにより、改めて自分と向き合い、新たな自己発見や視点に気付くことができ、心理的成長を助長することができた。また、「受容すること」に関して、自己受容だけではなく、対人関係においても効果が認められた。

「表現すること」については、学年合唱の取組にて、学級での「共同コラージュ」で自己の思いや願いを書き『仲間』の言葉に形取って完成させた取組で効果が上がった。生徒が「共同コラージュ」として表現するまでには、自己の内面と向き合い、友達の意見と出あうなど、自分や友達（人）、友達の思いや願い（もの）、学年合唱や共同コラージュ（こと）を生かして活動できたと考える。このようなかかわり合いの体験を通して「表現する」能力が養われ、一方でその能力が効果的に作用したと考えた。

ところで、考察の観点には挙げていなかったが、本実践に成果が上がった要因に、教師の日常的な教育活動を挙げておきたい。プログラムを実施するにあたり、指導者である教師が真剣に生徒のことを考え、実施プログラムの内容を研究して授業に臨まれたこと、そして、ほとんどの生徒が指導を素直に受け、毎回の授業が成立したことも大きな要因である。生徒とのかかわりでは、毎日一人一人の生活記録を読みコメントを記入し、休み時間や給食時間でのコミュニケーションや、放課後の学習指導などの生徒一人一人を大切にしたい取組からは、「自分

のことをしっかり見てくれている」という実感を生徒がもち、担任と生徒のよき関係性を構築していたことも成果の要因であると考えられる。また、学年主任をはじめとする1年団教師が4月より「仲間づくり」を目標とした共通理解のもと、日々の教育活動の中で、生徒とコミュニケーションをとり、細やかなかかわりを続けた成果とも言える。授業はもとより、休み時間や給食、清掃時間、部活動など、生徒のいる場面には小さなことにも声をかける教師の姿が必ずと言ってよいほど存在していた。このような生徒を取り巻いている環境（人・こと・もの）が連鎖・連動した効果が大きかったと考える。

V 今後の課題

今後の課題として、次の3点を挙げる。1点目は、入学から卒業までの3年間を見通したプログラム計画の立案である。実践期間における1年生に実施したプログラム内容は効果のあるものとなったが、その期間だけの取組で人間関係づくりが終結したわけではない。3年間を見通し、学年や生徒の実態、発達段階を踏まえ、学校行事等と関連させた体系的なプログラムの開発が必要である。2点目は、今回のSGEのプログラムと合わせて、SSTやアサーション・トレーニング、ストレスへの対処法など、スキル学習をプログラム化することである。生徒一人一人の実態や学年の状況に応じた社会的スキルの指導を行うことにより、より効果が上がることが示唆されたからである。3点目は、生徒たちが身につけた人間関係調整力を、学校外で活用できるように、汎用性をもたせることである。学校で身につけた能力を、保護者や地域と連携・協力を行い、家庭を介した社会でも保持し、生きて使える能力としなければいけないと考える。

今回の実践では、中学校の入学時におけるよりよい人間関係づくりを目指し研究を進めてきた。入学前のアンケート調査では、学校へ来る「楽しみ」の理由の中で「友達」が第1位になっていた。その反面「不安」の理由にも「友達」は第2位となっていた。思春期でもあり、心身ともに大きな成長をとげる中学生の多感な時期、生徒はいろいろな期待や不安を抱いて入学してくる。どの生徒も自分らしさを失わせないような居場所づくりや集団づくりを、学級、学年、学校単位で、人とのかかわりを大切にしたい実践を今後も積み重ねていきたいと考える。

注釈

注1) 絵画用語。「貼りつけ」を意味する。画面に印刷物、布、針金、木片、砂、木の葉など様々なものを貼りつけて構成する絵画技法のこと。

文献一覧

- 井上信子 (1986) 「児童の自尊心と失敗課題の対処との関連」教育心理学研究34(1), pp. 10-19
- 大竹直子 (2005) 「自己表現ワークシート(1)」図書文化社
- 大竹直子 (2008) 「自己表現ワークシート(2)」図書文化社
- 片野智治 (2009) 「教師のためのエンカウンター入門」図書文化社
- 河村茂雄 (2001) 「グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム」図書文化社
- 久我直人 (2015) 「教育再生のシナリオの理論と実践」現代図書
- 久保田員生 (2002) 「学級集団の形成に関する一考察ー中学校入学期における話し合い活動と仲間づくりを通してー」鳴門教育大学大学院教育臨床コース修士論文
- 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力に関する研究会 (中間取りまとめ)」(www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf; 2017. 10. 27アクセス)
- 小泉令三 (2011) 「社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践」ミネルヴァ書房
- 小泉令三・山田洋平 (2011) 「社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方 中学校編」ミネルヴァ書房
- 高知市教育委員会 (2011) 「高知あったかプログラム」高知市教育研究所
- 河野哲也 (2018) 「じぶんで考えじぶんで話せる こどもを育てる哲学レッスン」河出書房新社
- 國分康孝 (1981) 「エンカウンター 心とこころのふれあい」誠信書房
- 國分康孝 (1992) 「構成的グループ・エンカウンターの意義と課題」誠信書房
- 國分康孝 (1999) 「エンカウンターで学級が変わる Part 3 中学校編」図書文化社
- 國分康孝・片野智治 (2001) 「構成的グループ・エンカウンターの原理と進め方」誠信書房
- 國分康孝・國分久子 総編集 (2004) 「構成的グループ・エンカウンター事典」図書文化社
- 小坂浩嗣・山下一夫 (1996) 「関係性と教師の人間性」鳴門生徒指導研究 第6号, pp. 86-97
- 鯖戸善弘 (2016) 「コミュニケーションと人間関係づくりのためのグループ体験学習ワーク」金子書房
- 静岡県教育委員会 (2015) 「人間関係づくりプログラム 改訂版」静岡県教育委員会義務教育課
- 清水井一 (2006a) 「社会性を育てるスキル教育35時間 総合・特活・道徳で行う年間カリキュラムと指導案 中学校1年生」図書文化社
- 清水井一 (2006b) 「社会性を育てるスキル教育35時間 総合・特活・道徳で行う年間カリキュラムと指導案 中学校2年生」図書文化社
- 清水井一 (2006c) 「社会性を育てるスキル教育35時間 総合・特活・道徳で行う年間カリキュラムと指導案 中学校3年生」図書文化社
- 下山晴彦 監訳 (2006) 「子どもと若者のための認知行動療法ワークブック」金剛出版 (Stallard, P (2002) Think Good-Feel Good: A Cognitive Behavior Therapy Workbook for Children and Young People. New York: Wiley)
- 新里健・島袋有子 (2008) 「やってみよう ソーシャル・スキル・トレーニング33」グリーンキャット
- 林伸一 (1999) 「エンカウンターで学校が変わる ショートエクササイズ集」図書文化社
- 林伸一・飯野哲朗・築瀬のり子・八巻寛治・國分久子編 (2001) 「エンカウンターで学校が変わる ショートエクササイズ集 Part 2」図書文化社
- 平山栄治 (1998) 「エンカウンター・グループと個人の心理的成長過程」風間書房
- 福島脩美 (2005) 「自己理解ワークブック」金子書房
- 星野欣生 (2003) 「人間関係づくりトレーニング」金子書房
- ボウルビー, J. / 作田勉 監訳 (1981) 「ボウルビー 母子関係入門」星和書店 (Bowlby, J. (1979) The Making & Breaking of Affectional Bonds. London: Tavistock Publications)
- 松尾康則・葛西真記子 (2015) 「児童生徒の人間関係調整力の育成に関する研究」鳴門教育大学学校教育研究紀要第29巻, pp. 139-149
- 三崎隆 (2014) 「これだけは知っておきたい『学び合い』の基礎・基本」学事出版
- 文部科学省 (2010) 「生徒指導提要」ぎょうせい
- 文部科学省 (1998) 「中学校学習指導要領解説 特別活動編」ぎょうせい
- 文部科学省 (2008) 「中学校学習指導要領解説 特別活動編」ぎょうせい
- 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 特別活動編」ぎょうせい
- 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 音楽編」ぎょうせい
- 山下一夫 (1999) 「生徒指導の知と心」日本評論社
- 横浜市教育委員会 (2010) 「子どもの社会的スキル横浜プログラム 個から育てる集団づくり51」学研教育みらい
- 吉澤克彦 (2011) 「エンカウンター・エクササイズ12 か月 中学校」明治図書

